

(西暦) 2017年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

作業療法士を目指す学生の学習動機の変化
— 複線経路等至性アプローチによる分析 —

学位の種類: 修士 (作業療法学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 16896604

氏名: 中村 恵理子

(指導教員名: 小林 隆司 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

作業療法養成校 (以下、養成校) において、学生の学力不足や意欲・主体性のなさが報告されており、作業療法士養成校にとって学生の学習意欲を高め主体的な学習へ導くことは重要な課題となっている。

そこで本研究では、作業療法士を目指す学生が、養成教育のどの時期にどのように作業療法の学習を進め、どのようにして作業療法士の魅力に傾倒し、主体的な学習へとモチベーションを高めていくのか、その過程を明らかにすることを目的とした。

研究デザインには、複線経路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: 以下 TEA)⁷⁾ を採用した。対象は作業療法士養成課程終了後 2 年以内の者で、①入学時に正規就労経験がない者、②現在作業療法士として働いている者、③1 回 30~60 分程度のインタビューを全 3~4 回受けることができる心身機能を有する者 8 名とした。

TEA を用いて学習意欲が変化する時期や内容を分析した結果、1【作業療法士の積極的選択と消極的選択期】、2【リアリティショックと他者比較期】、3【現実検討と非現実検討期】、4【中だるみ期】、5【自己対峙と作業療法への傾倒期】、6【職業アイデンティティの確立と非確立期】、7【国家試験への積極的学習と義務的学習期】、8【職業アイデンティティの追求と承認欲求期】の時期区分が抽出された。

【リアリティショックと他者比較期】では、対象者らは入学後に作業療法のイメージと

基礎医学系科目との学習内容にギャップを感じ、作業療法士になりたい気持ちと学習意欲を低下させていた。その後学習意欲の向上した者は、学習動機の二要因モデルでいう関係志向と自尊志向が学習意欲向上の動機となっていた。そのため学習意欲を高める方法として1年次には他者との情報共有をはかり目標に向けた関係性づくりをすることや、早期からの作業療法体験学習などを中心としたカリキュラムを組むことで実用志向や充実志向に基づいた学習意欲の向上へと変換していけることが示唆された。

また【自己対峙と作業療法への傾倒期】では、業療法の学びに対する価値観が「めんどくさい・義務感でやっている」から「対象者のための勉強」へ変化する重要なポイントとなっていた。実際の患者を目前に作業療法を実践する体験は、自己の役割を明確にし、その役割に対して自分自身に何ができるのかといったように、自己対峙せざるを得ない状況となり、それが主体性、そして学習意欲の向上を促したことがわかった。

そして【職業アイデンティティの確立と非確立期】では前節と同様に、自己対峙や作業療法の魅力に触れて学習意欲が向上したが、更に、自身が作業療法士としてどのような役割を持つのかを体験し、自分自身の職業としての価値が統制されていく過程であることがわかった。

作業療法教育に対する示唆として、学習意欲を高める方法として1年次には他者との情報共有をはかり目標に向けた関係性づくりをすることや、早期からの作業療法体験学習などを中心としたカリキュラムを組むことで実用志向や充実志向に基づいた学習意欲の向上へと変換していけるのではないかと考えた。